

高崎市文化財調査報告書第 285 集

# 上並榎・下松遺跡 3

— 鉄塔建築に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2011

高崎市教育委員会

## 例 言

1. 本書は東京電力株式会社の鉄塔建築に伴い実施された、「上並榎下松遺跡」第3次調査（高崎市遺跡番号496）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の所在は、群馬県高崎市上並榎町字下松18番地3、19番地4である。
3. 発掘調査面積は98.6㎡である。遺跡検出面積は第1面59.15㎡、第2面49.34㎡、第3面49.21㎡、合計157.7㎡である。
4. 発掘調査は、平成22年12月2日から平成22年12月27日まで実施した。
5. 発掘調査及び整理作業は、高崎市教育委員会の指導・監督の下に、事業者と委託契約を結んだ株式会社シン技術コンサルが実施した。
6. 調査体制は以下の通りである。

高崎市教育委員会	田口一郎、滝沢 洋、須山奈保子
株式会社シン技術コンサル	調査担当：小林 弘
	測量担当：志村将臣、光松 章、成出蔵人
7. 本書の編集は小林・小池雄利亜・吉田瑠美子（株式会社シン技術コンサル）が行った。執筆は第1章を田口、第VI章を株式会社パレオ・ラボ、他を小林が行った。
8. 本調査における図面・写真・遺物は、高崎市教育委員会に保管している。
9. 発掘調査及び報告書作成に従事した作業員は以下の通りである。（敬称略・五十音順）  
五十嵐慶三郎、大村英枝子、栗原静江、斉藤文子、鈴木澄江、鈴木 実、千葉和枝、中里洋子、桐本万男、大和律子、六反田達子
10. 発掘調査の実施及び本書の刊行にあたり、下記の方々・諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。（敬称略）  
坂口 一、佐々木由香、株式会社トラスト技研、株式会社パレオ・ラボ、細谷印刷有限会社、山下工業株式会社

## 凡 例

1. 本書掲載図に使用した地図は、第1図、及び第3図が国土地理院発行1/25,000地形図『下室田』・『高岡』・『前橋』・『高崎』、第2図が国土地理院発行1/25,000治水地形分類図『下室田』・『高岡』・『前橋』・『高崎』である。
2. 遺構配置図の座標については、世界測地系に基づき平面直角座標第IX系を使用した。また、遺構平面図に示した方位は、座標北である。
3. 土層の色調は『標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所色票監修2002版）による。
4. 火山噴出物の表記は略号を用いた。浅間A軽石=As-A、浅間Bテフラ=As-B、浅間C軽石=As-C、榛名ニッ浜浅川テフラ=Hr-FA、榛名ニッ浜伊香保テフラ=Hr-FPである。
5. 遺物の表記は一部で略号を用いた。ピット=P、溝=SDである。
6. 写真図版における遺物写真の縮尺は、木製品が1/3、土器が1/2である。

## 目次

例	頁	
凡例		
第I章	調査に至る経緯	1
第II章	調査の方法と経途	2
第III章	遺跡の立地と取巻	3
第1節	地理的環境	3
第2節	歴史的環境と周辺遺跡	4
第IV章	基本層序	6
第V章	検出された遺構と遺物	7
第1節	第3遺構確認面	7
(1)	水田跡	7
第2節	第2遺構確認面	7
(1)	水田跡	11
第3節	第1遺構確認面	11
(1)	水田跡	11
(2)	ピット	16
(3)	溝	16
第VI章	自然科学分析	17
第VII章	まとめ	20
写真図版		
抄録		

## 挿図目次

第1図	遺跡位置図	1	第10図	第2面遺構断面図	12
第2図	遺跡周辺の地形	3	第11図	第2面遺物出土状況平面図	13
第3図	周辺の遺跡	5	第12図	第2面遺物出土状況断面図	13
第4図	基本十層柱状図	6	第13図	第2面出土遺物実測図	14
第5図	調査区壁面土層断面図(1)	8	第14図	第1面遺構平面図	15
第6図	調査区壁面土層断面図(2)	9	第15図	第1面遺構断面図	15
第7図	第3面遺構平面図	10	第16図	遺跡周辺の水田遺構	21
第8図	第3面遺構断面図	10	第17図	山下駄円形仲復元図	23
第9図	第2面遺構平面図	12			

## 表目次

第1表	周辺遺跡一覧表(1)	4	第4表	出土遺物観察表(2)	14
第2表	周辺遺跡一覧表(2)	5	第5表	ピット一覧表	16
第3表	出土遺物観察表(1)	13	第6表	出土木製品の樹種同定結果一覧表	18

## 写真図版目次

PL.1	調査区全景、調査区南西壁面1～XIV層、調査区南西壁面IV～XIV層、第3面畦畔1断削り断面、第3面完掘全景	PL.3	第2面足跡、第2面下木材出土状況、No.2～4出土状況、第1面畦畔1断削り断面、第1面完掘全景
PL.2	第2面完掘全景、第2面検出状況、第2面畦畔1・水田2断面、第2面畦畔1検出状況、第2面畦畔1断削り断面	PL.4	出土遺物No.1～9

## 第1章 調査に至る経緯

平成22年4月、東京電力高崎支社（以下事業者）より高崎市教育委員会（以下市教委）に鉄塔建設予定地内の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、該当地隣接地において古墳～平安時代の水田跡が調査されており、周辺地域にも拡がる可能性が大きいため、試掘調査による確認を行うことと、その結果による工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

同年9月16日付けで地権者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年10月26日に工事予定地の試掘調査を実施し、古墳時代の土石流下の2面と平安時代の浅間山B軽石層下の1面の計3面の水田跡を確認した。

試掘結果を受けて、埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、建設予定の変更は不可能ということなので、記録保存の発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、株式会社シン技術コンサルに委託して実施することとなり、平成22年12月3日付けで高崎市長・事業者・シン技術コンサルの三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成22年12月3日付けで事業者とシン技術コンサルの二者で発掘調査委託契約が締結された。



第1図 遺跡位置図

## 第Ⅱ章 調査の方法と経過

今回の調査は、鉄塔の建物部分にあたる 98.6㎡を調査対象とした。調査は3面に亘って実施した。試掘結果から、最深の第3面では地表から約 240cmになることが予想された為、調査区周囲の壁には約 60度の傾斜をつけて掘削を行った。よって、調査区の面積は第1面で 59.15㎡、第2面では 49.34㎡、第3面では 49.21㎡となった。延べ面積は 157.7㎡である。

第1面の調査では、まず現地表からおよそ 1.5mの As-B層 (V層) 上面までをバックホウによって掘削した後、As-B層をジョレン・移植コテ等で除去して遺構検出作業を行った。尚、第1・2面検出の際の排土は、敷地外指定場所へダンプトラックを用いて移動した。

第2面の調査は、再び重機を使用し更に 60cm程下の Hr-FA 洪水層 (IX・X層) まで掘削し、その後同様に Hr-FA 洪水層を除去して遺構検出を行った。

第3面の調査は、第2面から 20cm程スコップで掘り下げた後、移植コテを使用して As-C 混土 (XII層) を除去し、XIII層上面での遺構確認を行った。

第1～3の各面調査終了後、高所作業車を用いて全体撮影を行った。

作図作業については、調査区外周壁面の土層断面図は写真測量、その他の計測は全てトータルステーションを使用した。

写真記録は 35mmモノクロネガ・同カラーリバーサルフィルムの2種類を使用した。特に、高所作業車による調査区全景写真の撮影には 6×7判カラーリバーサルフィルムも使用した。尚、補助的にデジタルカメラでも撮影を行った。

調査の経過は、以下に掲げる。

平成 22 年

- 12月2・3日 器材搬入。表土掘削。排水ポンプによる 24 時間排水開始。
- 12月4日 SD1、P1～5 調査。第1面遺構確認。
- 12月6日 第1面水田跡検出。高所作業車での写真撮影ならびに平・断面の記録。
- 12月7日 第2面直上まで重機による掘削。
- 12月8・9日 第2面遺構確認・検出。
- 12月10日 第2面水田跡の高所作業車での写真撮影ならびに平・断面の記録。
- 12月13～15日 第3面直上まで人力による掘削。
- 12月16日 第3面遺構確認・検出。
- 12月17日 第3面の高所作業車での写真撮影ならびに平・断面の記録。
- 12月20日 第3面下にトレンチを掘削。土層断面の記録。
- 12月21・22日 調査区埋め戻し。
- 12月24日 器材搬出。
- 12月25日 安全撤去。
- 12月27日 仮設電源撤去。終了確認。調査終了。

### 第三章 遺跡の立地と環境

#### 第1節 地理的環境

高崎市は関東平野の北西奥部に位置する。市の西端は長野県に接し、ここを水源とする烏川が市域を貫き南東流する。烏川は中・下流域で右岸側より碓氷川・鏡川、左岸側から榛名川・井野川等の支流を合流させ、玉村町・伊勢崎市・碓氷原の境界付近で利根川と合流する。高崎市域の西部と、東平部の烏川以南のほとんどは山地・丘陵で占められ、東平部の烏川以北は、高崎・前橋台地上に広がる。前橋台地は2～2.4万年前の浅間山体崩壊により発生した前橋泥流を基盤とし、その大部分を榛名・浅間山等が噴出した際の噴出物が覆って現在の地形を形成している。このうち井野川右岸から烏川左岸にかけての部分では、前橋泥流の上に高崎泥流層が更に数メートルの厚さで堆積しており、高崎台地と呼ばれている。

本遺跡が所在する上並榎町は、JR北高崎駅から北西へ約1.1kmの、榛名山南東麓の扇状地と高崎台地が接する地域にある(第2図)。北東方向1.9kmには井野川が南東流し、南西方向1.2kmには烏川が南東流する。井野川右岸には1.5km前後の幅で台地状の高まりが分布し、烏川左岸には幅200m前後の自然堤防が築造している。本遺跡はこれ等の微高地に挟まれた、幅1km前後の後背湿地位の低地内に立地している。この低地内にも島状の高まりと旧河道状の地形が入り組んでみられ、特に本遺跡地より西方で顕著である。本遺跡地は近年まで水田地として利用されていたが、現在はほとんどが宅地化されている。本遺跡地の現在の標高は約101.4mであるが、宅地化の際に約1mの厚さの盛土が施されている。



第2図 遺跡周辺の地形

## 第2節 歴史的環境と周辺遺跡

本遺跡周辺の弥生時代の遺跡は、中期後半以後から確認されている。鳥川左岸の微高地上では竜見町遺跡・巾遺跡 (15)・上並榎屋敷前遺跡 (12)・上並榎南遺跡 (13)、井野川右岸では浜尻遺跡群 (25)・浜尻旭貝戸遺跡 (26) など中期の住居跡が確認されている。本遺跡東北東 900m の大八木宮土甕り遺跡 (16) では当該期の遺物が出土している。弥生後期になると高崎市内の遺跡数は増加するが、鳥川左岸では減少し、上並榎南遺跡・巾遺跡などで住居跡が確認されているのみである。井野川の右岸では、融通寺遺跡 (20)・芦田貝戸遺跡 (22) など当該期の遺構・遺物が発見されている。

古墳時代の遺跡としては、本遺跡の北東方向 1km に下小島遺跡 (17) があり、前期の住居跡が確認されている。その他、鳥川左岸沿いの微高地の上並榎屋敷前遺跡・並榎台原遺跡 (14) など住居跡が確認されている。井野川沿いでは熊野堂遺跡 (28)・大八木原敷遺跡 (21)・小八木遺跡 (29)・芦田貝戸遺跡・雨壺遺跡 (27) など住居跡が確認されている。

本遺跡周辺で確認された古墳としては、北北東 700m に前方後円墳の六郷村 6 号墳 (32)、西方約 600m に 5 世紀後半の前方後円墳である上並榎稻山古墳 (30) が、その北北西 250m には 6 世紀後半の円墳である筑鍋小嵐山古墳 (31) が分布している。また、筑鍋小嵐山古墳の南東には、これと重複する方形周溝墓が調査されている。

古代の遺跡では、本遺跡の北西 2km を東山道 (36) が南西-北東方向に通ると推定され、寺ノ内遺跡 (24) など調査されている。また、平安時代の遺跡としては、鳥川左岸の微高地上に筑縄遺跡群 (11) があり、住居跡が確認されている。井野川右岸では融通寺遺跡・熊野堂遺跡・御布呂遺跡 (23)・大八木屋敷遺跡などで生居跡が確認されている。

中世の遺跡としては、遺跡地の西方 950m に並榎城 (34)、東方 750m に上飯塚城 (35) が立地している。また、中世に開鑿したとされている用水路の長野原は、遺跡地西方 2.2km の本郷町で鳥川より取水し、遺跡地南西方 600m を南東流している。

高崎市を含む群馬県内において特徴的に検出される生産遺跡に、火山噴出物に伴う水田遺構がある。本遺跡地に隣接する並榎北遺跡 (5)・並榎北Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡 (6) において洪水層下より弥生時代後期前半とされる水田跡が検出されている。並榎北遺跡を含む周辺の遺跡では、他の時期の水田も合わせて確認されている。As-C 下水田が芦田貝戸遺跡・御布呂遺跡・小八木遺跡・新保田中村前遺跡・口高遺跡などで、As-C 上水田が大八木屋敷遺跡・芦田貝戸遺跡などで、Hr-FA 洪水層下水田が下小島遺跡・融通寺遺跡・飯塚大道東遺跡 (10) などで、Hr-FP 下水田が御布呂遺跡・芦田貝戸遺跡などでそれぞれ確認されている。As-B 下水田は特に多く調査されており、本遺跡周辺を含む広範囲において条早制地割りが確認されている。

第1表 周辺遺跡一覧表 (1)

№	遺跡名	調査	文献
1	上並榎下谷遺跡 (第3次調査)	C 層下・FA 下・B 下水田	本書
2	上並榎下谷1遺跡	C 下・FA 下・B 下水田	中野英 110 頁 (1991)
3	上並榎下谷2遺跡	C 下・FA 下・B 下水田	中野英 125 頁 (1993)
4	上並榎跡料所Ⅰ・Ⅱ遺跡	C 下・FA 下・B 下水田	中野英 108 頁 (1990)、高倉金 65 頁 (1997)
5	並榎北遺跡	弥生水田、C 下・FA 下・B 下水田	中野英 34 頁 (1988)
6	並榎北Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡	弥生水田、C 下・FA 下・B 下水田	中野英 144 頁 (1990)
7	並榎町1遺跡	FA 下・B 下水田	高倉金 83 頁 (2002)
8	東根仲沖遺跡	FA 下・B 下水田	中野英 112 頁 (1991)
9	飯塚原出土遺跡	FA 下・B 下水田	中野英 186 頁 (2003)
10	飯塚大道東遺跡	FA 下・B 下水田	調査会 54 頁 (1990)
11	筑縄遺跡群	平安化層、B 下水田、方形周溝墓	中野英 50 頁 (1985)
12	上並榎原集約遺跡	弥生層、古墳化層	調査会 20 頁 (1992)
13	上並榎南遺跡	弥生住居	中野英 23 頁 (1985)
14	芦田貝戸遺跡	本館跡川	中野英 112 頁 (1991)
15	山遺跡	弥生包蔵地	高倉金 192 頁 (1992)
16	大八木宮土甕り遺跡	弥生住居、FA 下水田	中野英 78 頁 (1987)

第2表 周辺遺跡一覧表(2)

No	遺跡名	概要	文献
17	下小島遺跡	古墳・平安住居、埋立柱遺物	群像文119頁(1991)
18	下小島町道1・B遺跡	FA・F・B下水田、大塚水跡	市教委100集(1990)、調査会49集(1996)
19	大八木水田遺跡	B下水田	群像文12頁(1979)
20	藤道穿居跡	埋石脚遺物、赤土・赤土存貯、B下水田	群像文118頁(1991)
21	大八木新築遺跡	平安住居、FA・F・PP下水田	群像文158頁(1995)
22	川内川戸遺跡	古墳住居、C下・FA下・PP下・B下水田	市教委134集(1994)
23	御布井遺跡	平安住居、C下・FA下・PP下・B下水田	群像文185頁(1986)、群像文234集(1998)
24	寺ノ内遺跡	平安住居、B下水田、遺跡	群像文13頁(1979)
25	田代遺跡群	赤土住居	群像文26頁(1981)
26	御氏堀川戸遺跡	赤土・古墳・平安住居、方形埋石跡	調査会84集(2002)
27	雨倉遺跡	埋石脚遺物、縄文・赤土・平安住居、B下水田	群像文23頁(1984)
28	熊野塚遺跡	縄文・平安住居、C下・FA下・B下水田	群像文100集(1991)
29	小八木遺跡	古墳住居、C下・B下水田	市教委8・15集(1979・1980)
30	上笠原稲荷山古墳	四方縁円形、総長120m、舟形石室	調査会46集(1996)
31	瀧瀬小島山古墳	円墳、総長25m、竪穴式石室	群像文(1972)
32	大塚村6号墳	前方後円墳	上毛古墳誌覽
33	下小島稲荷山古墳	円墳、総長50m、横穴式石室	群像文(1972)
34	意徳城	中世城跡	群像「高崎市史」資料編3中世(1996)
35	上郷城跡	中世城跡	群像「高崎市史」資料編3中世(1996)
36	糠定前山遺跡群		

※参考文献における略号

高崎市教育委員会発刊調査報告書—市教委  
(9) 群馬県史文化財調査事業研究紀要文化財調査—群像文

高崎市遺跡調査会—調査会  
群馬県遺跡台帳Ⅱ 西毛編—調査会



第3図 周辺の遺跡



## 第四章 基本層序

本遺跡地周辺は、現在宅地化されており、この際の盛土（I層）が約1mの厚さで施されている。その下に旧耕作土（II層）が20cm程、As-A・As-Bと思われる軽石を多く含む土（III・IV層）が20cm程堆積する。As-B層（V層）は約8cmの厚さで確認でき、この直下を第1遺構確認面とした。この面では水田跡が検出された。この水田跡の耕作土（VI層）は10～18cm程で、下位にはHr-PPと思われる軽石を含む粘質土層（VII層）が約16cm堆積する。但し調査区の東部ではこのVII層がみられず、VI層の下はVIII層となっている。Hr-FA噴出に伴うと思われる洪水堆積層は厚さ約44cmで、VIII層とIX層の2層に分層した。上部の粘質土層（VIII層）は約23cm、その下部の粘質シルト部分（IX層）は約21cmである。この下位にHr-FAの二次堆積層と思われる、鈍い黄褐色でシルト質のX層が約4cmの厚さで堆積している。直下の第2遺構確認面では水田跡が検出されたが、この水田耕作土（XI層）の一部には上位のX層が跡き込まれており、これをXI'層とした。XI層の厚さは約16cm、XI'層は約2～14cmである。XI層とその下位のXII層からは土器・木製品などの遺物が出土した。As-C層は粘層では検出されず、XI層とXII層中に含まれる。特にXII層には多量に泥じり、約4cmの厚さで堆積する。XII層直下を第3遺構確認面とし、調査を行った。XII層下の水田耕作土と思われるXIII層は厚さ約16cmの黒褐色粘質土。XIV層の粘質土層には、下位層のブロック状の泥人がみられ、水田耕作土の可能性がある。調査区際のトレンチ断面で確認したところ、調査区南西半部では、XIV層下に黒色粘質土（XV層）、黒褐色粘質土（XVI層）がほぼ水平に堆積しており、湿地における自然堆積土層と考えられる。但し調査区北西壁際のトレンチ断面では、XIV層下は褐色粘質土（XVII層）となり、下位の黒褐色粘質土（XVIII層）・黒色粘質土（XIX層）とともに、南西方向へ下り、XVI層直下へ続く。

地表面から各遺構確認面までの深さは、第1遺構確認面約1.6m、第2遺構確認面約2.2m、第3遺構確認面約2.4mである。



第4図 基本土層柱状図

## 第V章 検出された遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は、水田跡が3面、溝1条、ピット5基である。水田跡は各遺構確認面で検出された。溝1条とピット5基は、第1遺構確認面の検出過程にV層上面で確認された遺構だが、第1遺構確認面に含めて掲載した。

遺物は、第2遺構確認面下のXI・XII層中から土器7点、木製品・木材9点が出土したが、これ等の出土状況は第2面の遺物出土状況平面図中に掲載した。他に、第1遺構確認面直上のV層中から土器1点、P1覆上から土器2点、P2覆上から土器1点、攪乱から土器1点が出土している。

以下、最も古い第3確認面から遺構確認面ごとに記載する。

### 第1節 第3遺構確認面

本調査区では、古墳時代初頭に噴出したとされるAs-Cの純層堆積は確認できなかった。しかし基本土層XII層の黒褐色粘質土にAs-Cと思われる軽石が多量に含まれており、この層の下、XIII層上面を第3遺構確認面とした。この面では水田跡と思われる遺構が検出された。

調査区の面積は49.21㎡、現地表面からの深さは約2.4mである。

#### (1) 水田跡

水田面1・2、畦畔1（第7・8図 PL.1）

第3遺構確認面では、調査区西側において畦畔の可能性のある直線状の高まり（畦畔1）が検出された。このことから、本確認面全面を水田跡と推定し畦畔1の西側を水田面1、東側を水田面2とした。

水田面1・2の検出範囲は最大値で水田面1が北北西-南南東5.76m、西南西-東北東2.32m、水田面2が北北西-南南東7.64m、西南西-東北東5.92mである。水田面はほぼ水平で、標高は約99.15～99.20mである。表面に耕作などに伴う人為的な痕跡は認められず、調査区北部の水田跡とその下層にはイネ科植物の葉が複数検出された。XII層の厚さは10～20cmである。この下位のXIV層は、XIII層と同質の土にXV層以下の上がブロック状に混じり込んでおり、耕作によって攪拌された可能性がある。

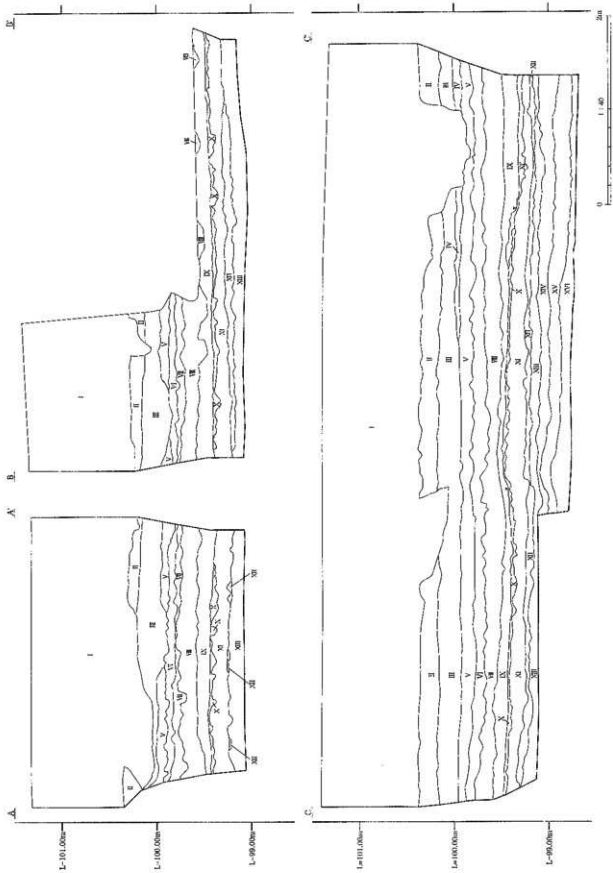
畦畔1の方向は北北西-南南東（N-20°-W）で、両端は調査区外へ延長する。検出長7.64m、下幅124cm、上幅72cm、高さ6cmである。水口は検出されなかった。畦畔1の断面観察では、畦畔1とその周辺の平坦部で土質の違いはみられなかった。

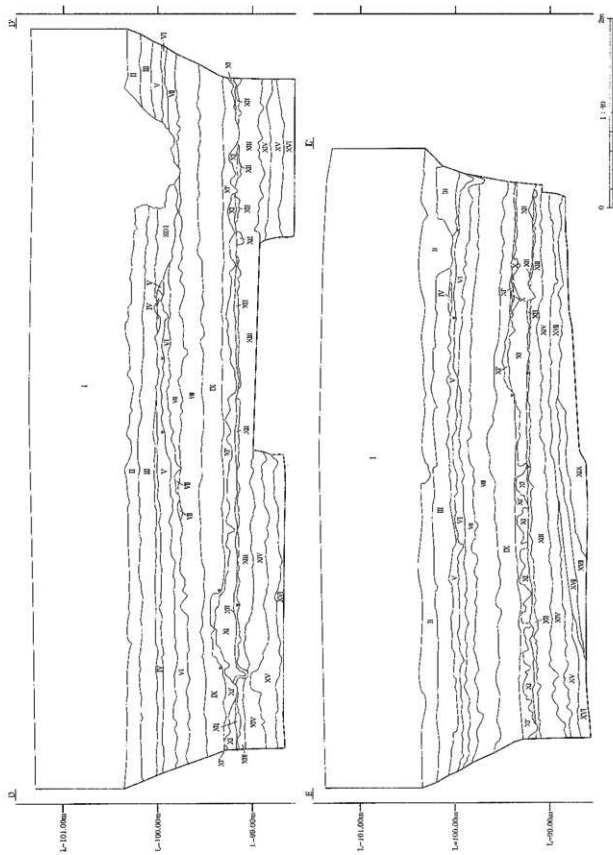
### 第2節 第2遺構確認面

基本土層のX層は6世紀初頭に噴出したHr-FAと思われ、これに伴う泥流堆積物が上位のVIII・IX層である。IX層もしくはX層の直下を第2遺構確認面とした。この面で検出された遺構は水田跡であり、X層が水田耕作上に動き込まれた状態（XI層）が確認できた。XI・XII層中より複数の遺物が出土した。これらは第2遺構確認面下からの出土であるが木部に掲載した。

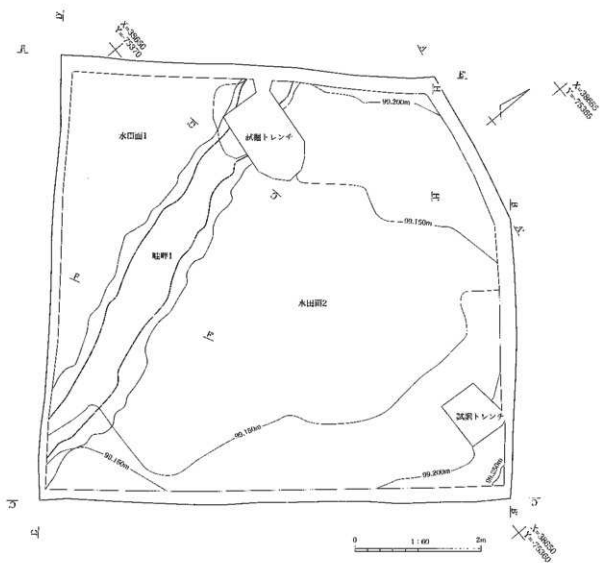
調査区の面積は49.34㎡、現地表面からの深さは約2.2mである。

图 1 调查区地质上构造图 (1)

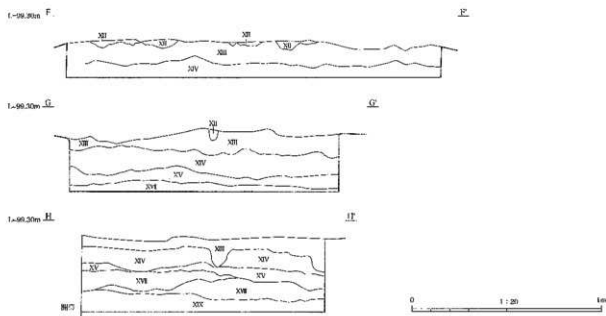




第6图 调查区繁图上层所在位置图(2)



第7図 第3面遺構平面図



第8図 第3面遺構断面図

## (1) 水田跡

水田面1・2、畦畔1～3 (第9～13図 第3・4表 PL.2～4)

第2遺構確認面では、調査区西半部で水田跡(水田面1・2)が検出された。水田面1と水田面2は南部で畦畔(畦畔1)によって区分されている。水田面1の東側外縁部を畦畔2、北側外縁部を畦畔3とした。

水田面1・2とも水田区画の全体は検出されていない。検出範囲の最大値は、水田面1が北北西-南南東6.36m、東北東-西南西4.3m、水田面2が北北西-南南東0.6m、東北東-西南西1.2mである。

水田面は平塚である。標高は約99.30～99.35mで、水田面1から水田面2方向へごく緩やかに下り傾斜を成す。水田耕作土は黒色粘質土(XI層)もしくは、Hr-FAブロックが混入する黒色粘質土(XI'層)である。

畦畔1の方向は西南西-東北東(N-65°-E)で、西端は調査区外へ延長し、東端は畦畔2に接する。検出長2.40m、下幅66cm、上幅50cm、高さ20cmである。畦畔2の方向は北北西-南南東(N-25°-W)で、北端は畦畔3に接し、南端は畦畔1に接する。長さ6.88m、高さ16cmである。畦畔3の方向は西南西-東北東(N-75°-E)で、西端は調査区外へ延長し、東端は畦畔2に接する。検出長0.48m、高さ8cmである。畦畔1の東端から1.0mには水口が構築されている。水口部分の幅は水田面間で8～18cmである。各畦畔の上部は、耕作土と同様のXI'層の上を盛り上げて形成されている。

水田面1の中央から水田面2にかけて人間の足跡が検出されている。歩行を辿るのは困難であるが、畦畔1の水口付近と中央部に集中している。足跡は深さ1～4cm程で、型々の大きさは、形状の圪轍なもので長さ23cm、幅10cm程である。水田面の足跡はIX層によって埋没している。

第2遺構確認面の東半部では畦畔は検出されなかった。但し、確認面は北端から南東部分へ緩やかに下り傾斜し、西寄りを中心に細かな凹凸も多い。この中には足跡と思われるものも含まれるが、重複が激しく、明確に足跡と判別できるものは少ない。この細かな凹凸の中には上位のHr-FA層が入り込んだ状態である。

第2遺構確認面のXI層～XII層より複数の木製品・木材(1～9)と土器片(10～16)、石器(17)が出土した。このうち、5～9はいずれも棒状で、畦畔2とほぼ平行の北北西-南南東(N-15°-W)方向に、水平・直線的に並ぶ。これらは腐食によって失われた部分が多く、取り上げ後の接合は殆ど不可能な状態である。2～4は水田面1の東側外縁部で出土し、いずれも加工痕がある。3は唯一の板状製品で、田下駄である。4は垂木と思われ、片方の端部に切り欠き加工がある。土器片の10～15は椀系の土器器と思われ、調査区南東側に集中して出土した。16はS字型の小片で、調査区北西縁際的位置より出土した。

## 第3節 第1遺構確認面

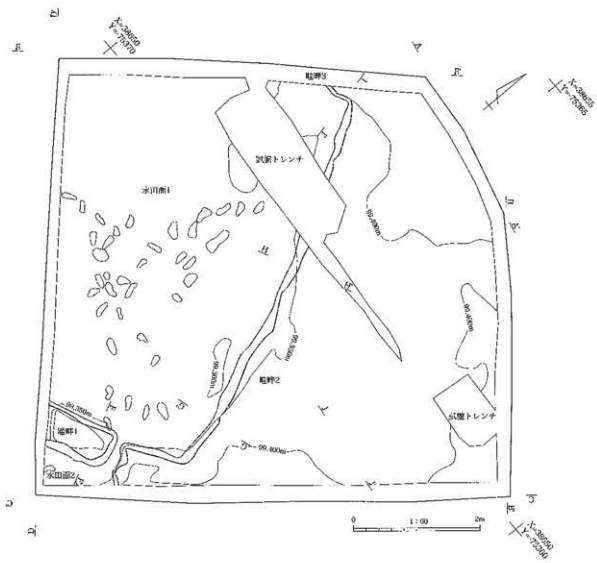
基本土層のV層は1108年に噴出したAs-Bである。V層の下、VI層上面を第1遺構確認面とした。検出した遺構は水田跡1面、溝1条、ピット5基である。中央北寄りに試掘トレンチ跡が残る。

調査区の面積は59.15㎡、現地表面からの深さは約1.6mである。

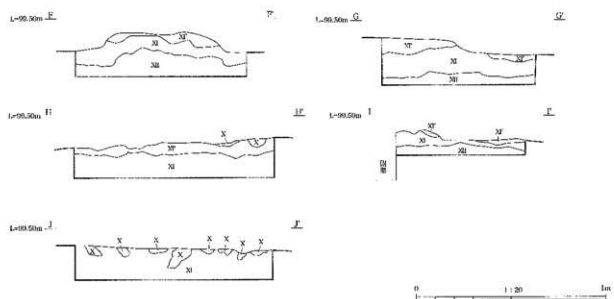
## (1) 水田跡

水田面1～3、畦畔1・2 (第14・15図 PL.3)

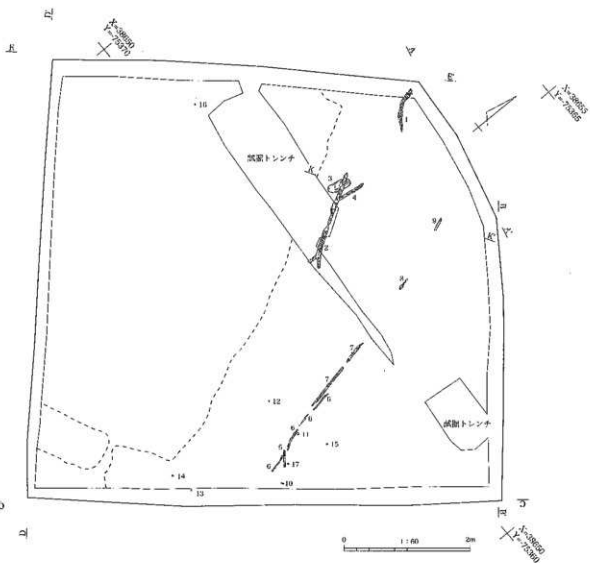
第1遺構確認面では、調査区全域で水田跡(水田面1～3)が検出され、畦畔は2条(畦畔1・2)検出された。調査区北西部で畦畔1と畦畔2はほぼ直角に接し、丁字型を成す。畦畔1より西側の水田面を水田面1、畦畔1より東側で畦畔2より北側を水田面2、南側を水田面3とした。調査区中央部では西南西から東北東方向に水田面より新しいSD1が重複する。



第9図 第2面遺構平面図

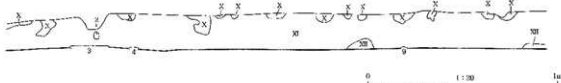


第10図 第2面遺構断面図



第11図 第2面遺物出土状況平面図

1:60.50m K



第12図 第2面遺物出土状況断面図

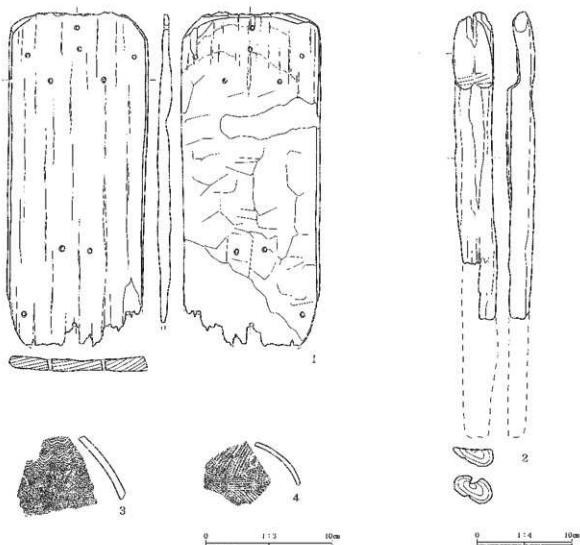
第3表 出土遺物観察表(1)

出土 No.	種類	出土層位 (標高)	長さ (cm)	幅 (径) (cm)	厚さ (cm)	特徴	
1	丸太材	XI 層中 (99.21 m)	73	4	—	湾曲する。表面の腐朽激しい。	
2	丸太材	XI 層中 (99.26 m)	(150)	5~7	—	平割材。特の二又部分を利用したY字状。二又の片方の先端に切断し、腐朽あり。一部に腐皮が残存する。下方は腐朽により分層・崩壊。サクラ属。	
3	1	樹下駄	XI 層中 (99.22 m)	35.3	14.6	1.5	木取りは輪切状。下部部欠損。下部部四角孔11箇所。左右対称に配置される。表面に腐皮が残存。雲母はわずかにくぼむ。スギ。
4	2	薪木材	XI 層中 (99.20 m)	32.4	4.0	2.6	上端部に切り欠き加工。切り欠き部に縦向の杉材の断面あり。断面は円形ではないが、丸材と思われる。下部は腐朽のため分層・崩壊。コナラ属コナラ属。
5	丸太材	XI 層中 (99.22 m)	28	3	—	腐朽激しく、両端部分層現象。縦方向に分層。	
6	丸太材	XI 層中 (99.20 m)	(150)	2	—	腐朽激しく、7片程に分層。横立平割。	
7	丸太材	XI 層中 (99.20 m)	(130)	3.5~4	—	上端部に切り欠き加工。切り欠き部に縦向の杉材の断面あり。先端に2方向からの向きの断面あり。下半部に分層。20片程に分層。ツバキ属。	
8	丸太材	XI 層中 (99.21 m)	20	2~4	—	腐朽激しく、2片に分層。接合不整。	
9	丸太材	XI 層中 (99.20 m)	22	2.5~3	—	腐朽激しく、5片に分層。接合不整。	

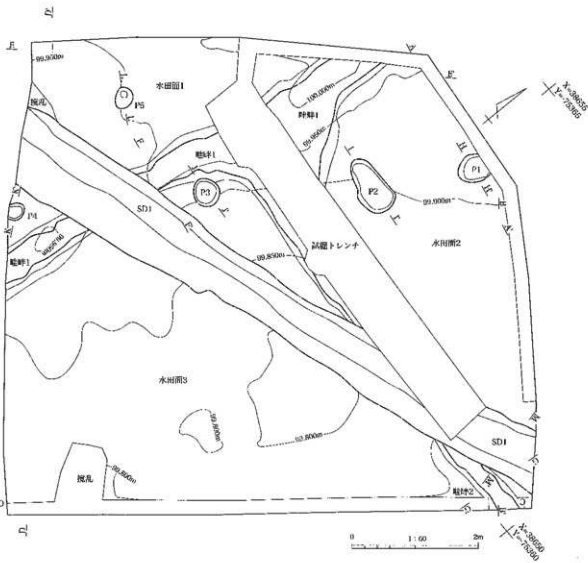


第4表 出土遺物要覧表(2)

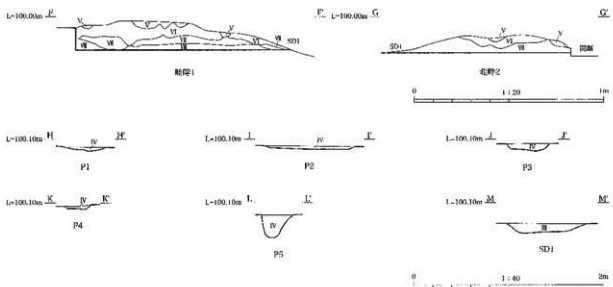
出土 No.	標識 No.	種類 別名	出土 位置	計測値 (cm・g) 保存 色調(外側・内側) / 構成	粘土	特徴・遺物・文様等
10	3	土師器 壺	XI 層	口:- 高:(5.3) 底:- 厚:0.6 胴部破片 外: にぶい黄褐色 内: にぶい褐色 / 良好・酸化層	磁砂質、赤褐色 色泥、石英、 角閃石	外: 飾細線状文。 内: ナデ。 いわゆる柳系の十段蓋。出土No.13・16と同一個体か。
11	5	土師器 壺小	XI 層	口:- 高:(2.2) 底:- 厚:0.6 胴部破片 灰青色 / 良好・酸化層	磁砂質、赤褐色 色泥、角閃石	外: ヘラナデ。 内: ヘラナデ。
12	6	土師器 甕	XII 層	口:- 高:(3.5) 底:- 厚:0.7 胴部破片 外: 陶灰色 内: にぶい黄褐色 / 良好・酸化層	磁砂質、赤褐色 色泥、石英、 角閃石	外: ヘラナデ。 内: ヘラナデ。
13	7	土師器 壺	XII 層	口:- 高:(2.5) 底:- 厚:0.6 胴部破片 外: にぶい黄褐色 内: にぶい褐色 / 良好・酸化層	磁砂質、赤褐色 色泥、石英、 角閃石	外: 飾細線状文。 内: ナデ。 いわゆる柳系の十段蓋。出土No.10・15と同一個体か。
14	8	土師器 甕	XII 層	口:- 高:(1.3) 底:(6.0) 厚:1.0 胴部破片 外面: にぶい褐色 内: にぶい黄褐色 / 良好・酸化層	砂質、赤褐色 泥、石英、 角閃石	外面: 瓦葺の字か。ナデ。 内: ヘラナデ。
15	9	土師器 壺小	XII 層	口:- 高:(3.3) 底:- 厚:0.7 胴部破片 外: 陶灰色 内: にぶい黄褐色 / 良好・酸化層	磁砂質、赤褐色 色泥、石英、 角閃石	外: ヘラナデ。 内: ヘラナデ。 出土No.10・13と同一個体か。
16	4	土師器 白付壺	XII 層	口:- 高:(3.4) 底:- 厚:0.3 胴部破片 外: 灰黄褐色 内: にぶい黄褐色 / 良好・酸化層	砂質、赤褐色 泥、石英、 角閃石	外: 黒目付。 内: ヘラナデ。 点検時代前期のS字口縁有付壺。
17		石製 礎石	XI 層	長:0.2 幅:7.0 厚:3.6 重:426.4 灰白色	石材:安山岩	平取台形。縦断面は楔形に近い。全面平洗して薄く光沢あり。



第13図 第2面出土遺物実測図



第14図 第1面遺構平面図



第15図 第1面遺構断面図

水田面1～3は、水田区画の全体は検出されていない。検出範囲の最大値は、水田面1が南北5.76m、東西2.56m、水田面2が南北2.32m、東西5.36m、水田面3が南北6.04m、東西6.28mである。

水田面はほぼ平坦であるが、細かな凹凸があり窪みはAs-Bで埋まっていた。足跡等明瞭な痕跡は確認されなかった。各水田の標高は水田面1が約99.95～100.00m、水田面2が約99.90～99.95m、水田面3が約99.80～99.85mで、各水田区画内でも北西から南東方向へごく緩やかに下り傾斜を成す。水田耕作土は黒褐色粘質土（VI層）で、1fr-FPと思われる白色軽石を含む。これはVII層が耕作土化されたものと思われ、厚さは16cm程である。標高の高い水田面1・2部分では、耕作土の下位にVII層が残存し、低い東側ではVII層まで耕作が及び、VI層の下部にVII層ブロックが混じる。

畦畔1は、南北方向（N-8°-E）で両端は調査区外へ延長する。検出長6.88m、下幅50cm、上幅38cm、高さは水田面1個が約2cm、水田面2個が約2.5cm、水田面3個が約3cmである。畦畔2は東西方向（N-87°-W）で、東側は調査区外へ延長する。検出長7.04m、下幅46cm、上幅34cm、高さは水田面2個が約2.5cm、水田面3個が約3cmである。VI層の上を盛り上げて形成されている。

遺物は、水田面3検出時にV層中より土師器小片が1点出土している。

## (2) ピット

P1～5（第14・15図 第5表）

P1～5は第1遺構確認面を検出する過程で、V層（As-B）上面で検出された。平面形は凹形または槽形である。P1～4の断面形は浅い皿形で、V層下部までの掘り込みであり、P5は断面形がV字状で、掘り込みはVI層まで及んでいる。覆土はいずれも基本土層のIV層（As-B 混土）と同質である。遺物は、土師器小片がP1で2点、P2で1点出土している。

第5表 ピット一覧表

No.	遺構名	平面形状	断面形状	規模 (m)			覆土	出土遺物	参照関係・備考
				長軸	短軸	深さ			
1	P1	槽形	皿形	54	45	6	IV層	土師器小片2点	一部非用器土に切られる。
2	P2	長槽形	皿形	94.5	45	3	IV層	土師器小片1点	
3	P3	円形	皿形	48	42	9	IV層	無し	
4	P4	円形	皿形	33	27	4	IV層	無し	南調査区外。
5	P5	円形	V字形	33	27	24	IV層	無し	

## (3) 溝

SD1（第14・15図）

SD1は第1遺構確認面を検出する過程で、V層（As-B）上面の調査区中央、南西壁と北東壁の間で検出された。調査区南西壁の土層断面では、IV層上面からVII層中まで掘り込まれている。ほぼ直線的な溝であり、検出長は9.68m、走行方向はN-47°-Eを示し、幅は0.68m～1.2mである。断面形は逆台形状で、深さは最深部で0.22mである。底面の形状は平坦で、南西から北東へわずかに下り傾斜を成す。覆土は単層で、基本土層のI層とほぼ同質の灰黄褐色粘質シルトで埋没している。人為的に埋められたものか否かは不明である。遺物は出土していない。

## 第VI章 自然科学分析

### 上並榎下松遺跡出土木材の樹種同定

#### 1. はじめに

上並榎下松遺跡は高崎市上並榎町に所在し、榛名山南東麓の扇状地と高崎台地に挟まれた後背湿地状の低地内に立地する、古墳時代と平安時代、中世の複合遺跡である。ここでは水田跡や溝跡などが検出され、古墳時代の水田跡から木製品が出土した。ここではこれらの木製品の樹種同定を行った。尚、木製品の器種と木取りの確認を佐々木が、樹種同定と本文作成を小林が行った。

#### 2. 試料と方法

試料は水田跡の第2遺構確認面に含まれるXI層で出土した4点の木製品である。第2遺構確認面の時期は、榛名ニッ所洗川テフラ (Hr-FA) が確認されていることから6世紀初頭と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りと器種の確認を行った。

樹種同定は、試料の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(径目)の各断面について、カミソリで薄い切片を切り出してガムクロラールに封入し、永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行った。作製したプレパラートは、パレオ・ラボに保管されている。

#### 3. 結果

同定の結果、針葉樹のスギ1分類群と、広葉樹のコナラ属コナラ節(以下コナラ節と呼ぶ)とツバキ属、サクラ属3分類群の、計4分類群が産出した。いずれの分類群も1点の産出であった。同定結果を第6表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、各樹種の光学顕微鏡写真を同版に示す。

##### (1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don スギ科 写真 1a-1c (出土No.3)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。放射組織は単列で、高さ1~10列となる。分野穿孔は大型のスギ型で、1分野に2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で切厘などの加工が容易な材である。

##### (2) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 写真 2a-2c (出土No.4)

年輪のはじめに大型の道管が1~2列並び、晩材部では急に径を減じた荷環で角張った道管が火災状に配列する環孔材であるが、材の収縮が激しく、小道管の配列は明確には確認できなかった。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、漏管から腹帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重くて強靱で、切削加工はやや難しい。

##### (3) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 写真 3a-3c (出土No.7)

角張った小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1~3列が直立する異性で、幅1~3列となる。

ツバキ属にはヤブツバキやサザンカなどがあり、ヤブツバキは本州、四国、九州の温帯に、サザンカは

山口県以南の温帯南部から亜熱帯に分布する常緑小高木の広葉樹である。材は重硬で、切削加工は困難である。

(4) サクラ属 (広義) *Prunus* s.l.バラ科 写真 4a-4c (出土No 2)

小型の道管が単独ないし2~4個不定方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は半穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が方形となる異性で、1~5列となる。

広義のサクラ属には、モモ属とスモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、広義のサクラ属とした。

4. 考察

出土した木製品の樹種は、垂木がコナラ節とツバキ属、田下駄がスギ、二股材がサクラ属であった。スギは大径木に生育しやすく木理通直であり、材質は比較的軽軟で加工性が良く、水湿にも強い樹種である。そのため追紐目の薄板状に加工され、田下駄として利用されていたと考えられる。また垂木で産出したコナラ節とツバキ属は共に重硬で強靱な材質を持つ樹種である。加重に耐える材質に重点を置いた材選択が行われていた可能性が考えられる。また二股材で産出したサクラ属は、重硬で強靱であるが加工性の良い材質を持つ樹種である。二股材の用途については出土状況や形態からは確認できなかった。

関東地方の古墳時代では、建築材にはコナラ属クヌギ節やコナラ節が、田下駄にはスギやヒノキが多く利用されている。また淡川市の中居遺跡では、古墳時代後期の竪穴住居跡でコナラ節の炭化材が多く産出している(山田, 1993)。上並榎下松遺跡では建築部材である垂木が2点、田下駄が1点のみの産出であり、器種ごとの木材の利用傾向は顕著には確認できなかったが、周辺遺跡で出土する器種と樹種との対応関係と円接の傾向を示した。

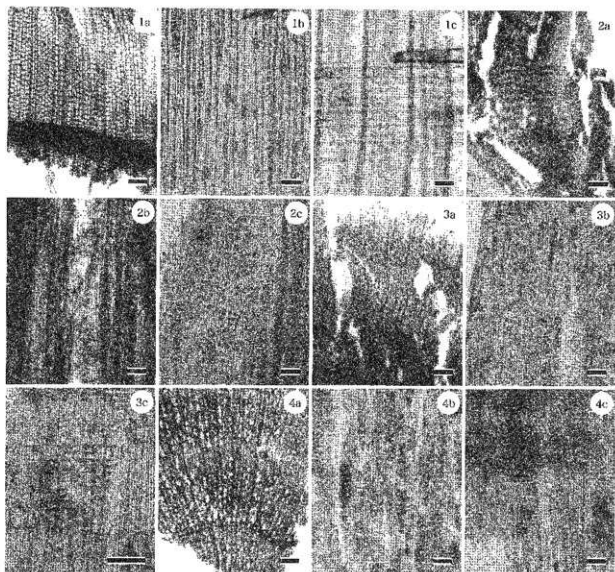
(小林克也・佐々木由香)

引用文献

山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 - 用材から見た人間・植物関係史, 242p, 福生史研究特別第1号.

第6表 出土木製品の樹種同定結果一覧表

出土No	出土遺構	出土層位	器種	樹種	木取り	備考
2	水田跡	XI層	二股材	サクラ属	半割	樹皮付 二股部の片端加工
3	水田跡	XI層	田下駄	スギ	追紐目	穿孔あり
4	水田跡	XI層	垂木	コナラ属コナラ節	芯持丸木	片端加工
7	水田跡	XI層	垂木	ツバキ属	芯持丸木 (現状は割材)	片端加工



上並榎下松遺跡出土木製品品の光学顕微鏡写真

1a-1c. スギ (出土No.3) 2a-2c. コナラ属コナラ節 (出土No.4) 3a-3c. ツバキ属 (出土No.7) 4a-4c. サクラ属 (出土No.2)

a: 横断面 (スケール=250  $\mu$ m) b: 接線断面 (スケール=100  $\mu$ m) c: 放射断面 (スケール=1:25  $\mu$ m · 2-4:100  $\mu$ m)

## 第Ⅶ章 まとめ

### 【As-B 下水田】

第1面の調査ではAs-B層(V層)を鍵層として調査を行った。As-B層は調査区全体に堆積しており、この直下で水田跡を検出した。調査区が狭小な為水田区画全体は検出されなかったが、丁字型に接する2条の畦畔と、これによって区画される3枚の水田跡の一部が検出された。畦畔はほぼ東西および南北方向である。調査区内では平行する畦畔は検出されなかったが、隣接する並横北遺跡で、畦畔1の南側へ接続すると思われる畦畔が検出されており、これと合わせてやや蛇行している様子がうかがえる。周辺の遺跡で検出された同時期の水田の多くは同一の条里に則って区画されていることが知られている。本調査区の水田跡もこの一部と考えられる。本調査区で大畦畔は検出されなかったが、本調査区の畦畔2から南側へ約82mの並横北遺跡では東西方向の大畦畔が確認されている。また、畦畔1から西へ約17mの並横北遺跡、そこからさらに西へ約113mの上並横下松Ⅰ・Ⅱ遺跡では南北方向の大畦畔が検出されている。

### 【Hr-FA 下水田】

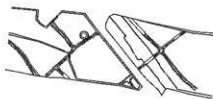
第2面の調査ではHr-FA層(X層)・Hr-FA降下に伴う泥流層(IX層)を鍵層に調査を行った。泥流層は調査区全体に堆積していたが、X層は調査区の東半のみに堆積していた。西半では直下の黒色粘土(XI層)に混在しており、これをXI'層とした。第2遺構確認面で検出された遺構は水田面1・2とそれに伴う畦畔であり、その範囲はXI'層の確認された範囲と一致した。このことから、代掻き作業が行われる前にHr-FAの降下があり、水田面1・2の範囲では降下したHr-FAを耕作土に動き込み水田の整形が行われたが、田植えが行われなままHr-FA泥流によって被覆されたものと考えられる。同様の状況は隣接する並横北遺跡・上並横下松Ⅰ遺跡でも検出されている。

水田面1・2の東側では、歩行痕と思われるものが多数検出された。さらに、水田面1の東端部から東へ1.2～2.1mの位置には敷設されたと思われる埋設木材列が検出されており、これと水田面1の間が大畦畔であったと考えられる。隣接する並横北遺跡・上並横下松Ⅰ遺跡でも同様に埋設木材を伴う大畦畔が確認されている。本遺跡で確認された大畦畔は、並横北遺跡の3・4区の境界となる大畦畔の北側延長部分である可能性が高い。他遺跡でもみられるように、この大畦畔によって複数の水田が囲まれて一つの区画を形成しているものと思われる。この区画単位ごとに水田の規格や作業状況に差異があったと考えられている。本遺跡の畦畔2の西側は並横北遺跡の4区と西一の区画であり、比較的広い水田区画の形成とHr-FAの動き込みがみられる。畦畔2の東側は並横北遺跡の3区と西一区画で、水田区画は検出されずHr-FAの混入もない。

### 【As-C 下水田】

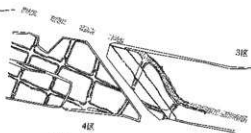
第3面の調査ではAs-Cを鍵層に調査を行ったが、本調査区ではAs-C純層の堆積は認められず、XI・XII層中に混入しているのみであった。As-C混土層直下のXIII層上面を第3遺構確認面として調査した結果、1条の畦畔状の高まりを検出し、これを畦畔1とした。この西側を水田面1、東側を水田面2としたが、耕作痕などの痕跡を見出すことはできなかった。このことから、第3確認面で検出した畦畔状の高まりは、As-C降下後に行われた水田耕作によって形成された疑似畦畔であると考えられる。但し、隣接する並横北遺跡ではAs-C混土層の下位に灰黄褐色の洪水層が存在し、この直下から弥生時代のもと思われる水田跡が検出されている。そして本調査区では、同様の洪水層は確認できなかったものの、As-C混土層の下位のXIV層の断面観察で、耕作による攪拌の痕跡と思われるものが確認されている。洪水層によって被覆されなかったものの、並横北遺跡で検出された弥生時代の水田跡の範囲が本調査区まで広がっていた可能性も考えられる。

As-B下水田



並視北

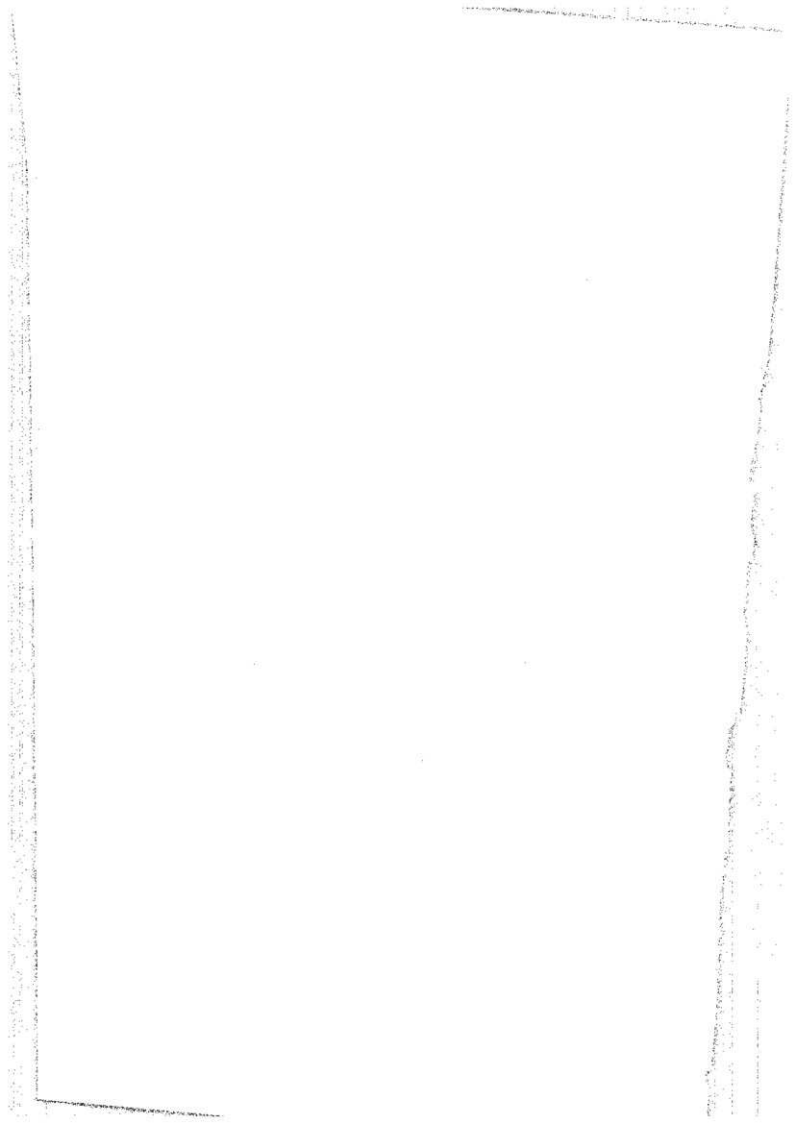
Hr-FA下水田



並視北



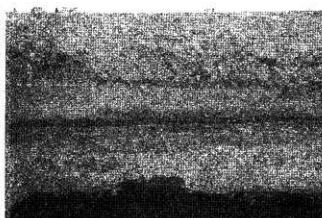




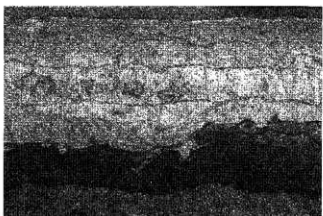
## 写真図版



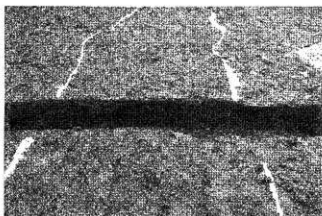
調査区全景 (南から)



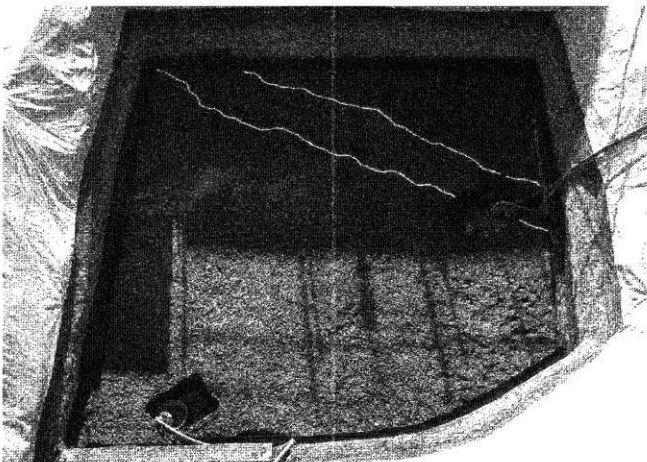
調査区南西壁面1～XIV層 (北東から)



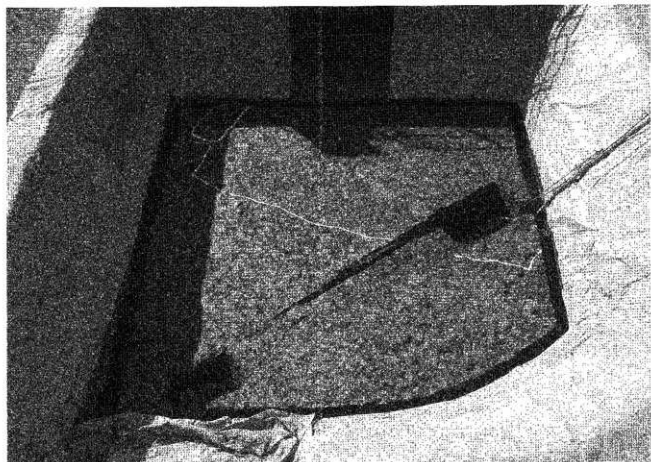
調査区南西壁面IV～XIV層 (北東から)



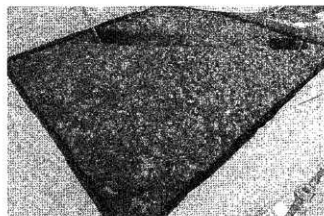
第3面畦畔1断割り断面 (南南東から)



第3面完掘全景 (北東から)



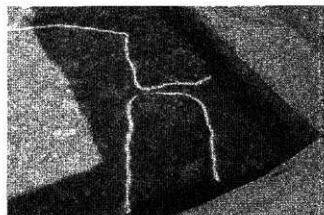
第2面完掘全景 (北東から)



第2面検出状況 (南から)



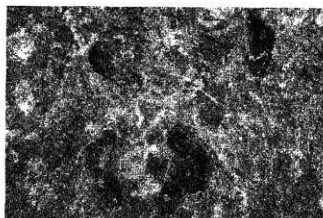
第2面畦畔1・水田2断面 (北西から)



第2面畦畔1検出状況 (西から)



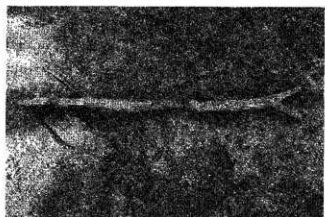
第2面畦畔1断削り断面 (西から)



第2面足跡 (東から)



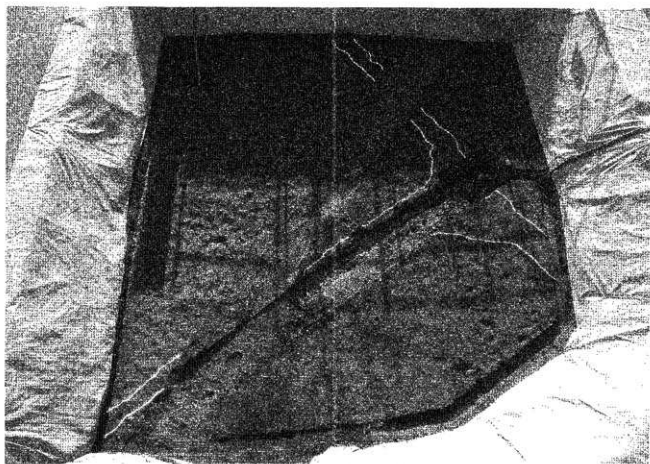
第2面下木材出上状況 (南東から)



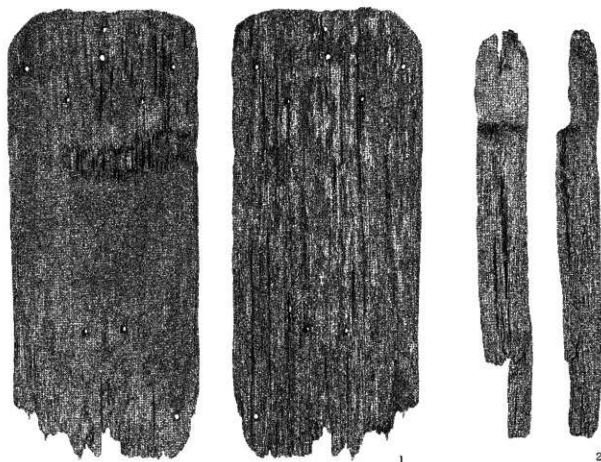
No. 2~4 歯状況 (南東から)



第1面階1階断面 (南から)



第1面完備全景 (北東から)



## 報告書抄録

フリガナ	カミナミエ・サガリマツイセキサン
書名	上並榎・下松遺跡3
副書名	鉄塔建築に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	—
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第285集
編著者名	小林一弘 (株式会社シン技術コンサル)
編集機関	高崎市教育委員会
所在地	〒370-8501 群馬県高崎市高松町35番地1
発行年月日	2011年 5月 31日

フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
カミナミエ 上並榎 サガリマツイ 下松遺跡	カミナミエ 高崎市上並榎町 アガリマツイ 字下松18番地3他	102024	496	36° 20' 44"	138° 59' 37"	2010.12.2 ～ 2010.12.27	98.6㎡	鉄塔建築

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
上並榎下松遺跡	生産	古墳時代	水田	2面	木製品、土師器片、 樽系土師器片等	
		平安時代	水田	1面		
		中世以降	溝 ピット	1条 5基	土師器	

### 上並榎・下松遺跡3 —鉄塔建築に伴う埋蔵文化財発掘調査—

平成23年5月31日 印刷

平成23年5月31日 発行

編集・発行／ 高崎市教育委員会  
高崎市高松町35番地1  
TEL 027-321-1291

印 刷／ 細谷印刷株式会社